

ハヌカの祭り

ジェイコブ・プラッシュ

イントロダクション

“ハヌカ (*Hanukkah*) ”はヘブライ語の“奉献”または“再奉献”を意味する“ハヌカット (*hanukkat*) ”から来ています。

ハヌカには4つの側面があります。最初のものは“伝統的”な面で、大半の人がなじみのあるものです。一方、最も重要なのは“歴史的”な側面、また“メシアによる”側面、そして“終末的な”側面です。

- ハヌカの“歴史的”な側面はマカベア家の時代に起こったことに焦点を当てます。イエスの誕生より160年前のことです
- ハヌカの“メシアによる”関わりは、ヨハネの福音書10章でイエスとその祭りを祝われたときにみられます
- “終末的な”見方とは、ハヌカの祭りがキリストの再臨の前触れである終わりの日にいかに繰り返され、再現されるかということです

したがって私たちは主に、歴史的な側面——“何が起こったか”。またメシアによる側面——“それがどのようにイエスによって成就されたか”。そして終末的な意味——“再臨とどのように関わりを持つか”に注目していきます。

伝統的側面

多くの人が次のような議論をします。「クリスマスは12月25日に祝われていたローマの農神祭から来ている。異教の祭日だ」ハヌカはキスレウの月の25日で、ヘブル人の月ではほぼ同じ時期です。実質的にヘブル人のすべての祭日は異教の類似した祭日よりも以前から存在していました。ただ異教徒たちは農耕周期に従って感謝を捧げ、その感謝と賛美を他の神々——雨や太陽、収穫のために、捧げていただけなのです。つまり、ヘブル人の祭日は異教の祭日への反論でした。神（ヤハウエ）は雨や収穫などに関して、真実の神に感謝させようとしていました。一方、人々が議論を持ち出し「これは異教の日で、あれは異教の日だ」と主張することは、神学的・歴史的に非常に不確かな事柄なのです。

使徒パウロは祭りや新月や安息日のことについて、誰にも批評させてはならないと言っています（コロサイ 2 章 16 節－17 節）。類似箇所がローマ 14 章 4 節から 5 節にあり、『あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。...ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。』と語られています。大切なのはそれらのことが主に対してなされているという点であって、そうでなければ全く行われたい方が良いでしょう。

クリスマスを祝うことに関する私の大きな問題は、それが主に対してなされていないことにあります。今のような状態なら、全く行われたいことを私は望みます。私たちはイエスさまがいつ生まれたか見当が付きません。根拠のある推測によると、仮庵の祭であったかもしれないといわれますが、誰も本当は知りません。神は私たちに教えられず、教える必要も感じなかったようで、明らかにそれほど重要なことでもないのでしょう。イエスさまが誕生したことこそが大切なのです。

しかしながら、ハヌカは少し違ったものです。それは歴史的なもの、聖書的なもの——新約聖書からですが——がハヌカの祭りに先行しています。一方、ユダヤ人文化——“イディッシュカイト”——の中でハヌカと関連付けられている大半のもの、そして多くのクリスチャンが（持っている知識の中で）知っているものの大半は、伝統的なハヌカから由来したものです。

ハヌカと関連のある伝統の大半が古代世界に起源を持っておらず、中世から来たものです。その祭りに関連した歌の歌詞でさえ中世から来ています。最も有名な「マオズ・ツウル・イェシュアティ」という歌も中世のヘブライ語から由来したもので、聖書的ヘブライ語や現代ヘブライ語からではありません。

ハヌカの伝統では油が八日間燃えたといわれています。神殿のメノラ（燭台）には一日分しか十分な油が無かったのに、八日間燃え続けたというのです。これは第一マカベア書や第二マカベア書に歴史的な記録が無く、確実に聖書中にもその記述はありません。この話は後代になって現われました。といってもそれが真実でなかったと言いたいわけではありません。起こったかもしれませんが歴史に記録されることは一度もなかったということなのです。ヨセフスの『ユダヤ古代誌』でも大々的に取り上げられることはありませんでした。人々はヨセフスが知っていたかどうか不思議がっていましたが、今日注目されている『ユダヤ古代誌』の大部分でそれは彼の強調点ではありませんでした。

ハヌカの祭りはユダヤ人の光の祭りであり、奇跡の祭りでした。奇跡とは燭台が八日間燃

え続けたということではなく、神がユダヤ人に強大な敵に対しての信じ難い勝利を与えられたことに関してのものでした。そして光についてはもちろん、神殿を再奉献し、神殿の中でメノラに光を灯すことができたことに関してです。

詩編 119 編 105 節から私たちは知っています

『あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。』

この箇所のゆえにヘブル人にとっては神殿の中で燃えるメノラは神のみことばを象徴していました。一方、その神殿の窓は独特な形をしていました。大抵の場合、窓は建物の中に光を集中させるために外側は広く、内側になるにつれ狭く作られていました。しかしメノラが立っていた場所の神殿の形は、内側が広く、そして可能な限りの光をメノラからとらえるために狭く密接して作られていました。それは光が“ミロ (*Millo*)”と呼ばれるものを照らし、神殿の丘から下のダビデの都に行き渡るためでした。したがって、神殿の建築様式に織り込まれた考えは、ヤハウエの光—みことばの光—が神殿から来るというものでした。神殿の建築様式は律法がシオンから広がり、輝き出すということを象徴していました。そして神殿が再奉献された時、これがそのアイデアで、またメノラに光を灯せると彼らは考えていたのです。

現代には伝統的と言われるハヌカの食べ物があります。人々は“スフガニヨット (*sufganiyot*)”と呼ばれるゼリー状のドーナツを食べます。古代の人がそれを食べていたとは私は思いません。ユダヤ人の食べ物に興味があるなら、人々は“ラトケ (*latke*)”といって、芋で作ったパンケーキ、変わった種類のクニッシュ (焼く、あるいは揚げた団子) を食べていました。

そしてもちろん、“ドレイデル (*dreidel*=こま)”というものがあります。これは“回ること”を意味するヘブライ語の“スヴィボン (*svivon*)”を元にしたイーディッシュ語です。そのこまには“ネス・ガドール・ヒヤ・ポ (偉大な奇跡がここで起こった)”の頭文字が書かれています。そのドレイデルというこまを回し、子どもたちはそれで遊びます。一般的にハヌカの祭りに関連付けられていることは歴史的に起こったこととほとんど関係がなく、ラビたちが後代に関連させたものは別として、神学的な重要性もほとんどありません。

このように歴史的なハヌカと伝統的なハヌカがあります。これを考えるひとつの方法が、ルカやマタイにある降誕物語と教会の伝統を比べてみることです。教会の伝統はただ単に飾り付けられただけではありません。多くのものがでっち上げられています。伝統では三人の賢者が来たといわれていますが、それも新約聖書で確認することはできません。これ

らの話はただでっち上げられたものです。これはハヌカとも同じことです。

歴史的側面

ダニエル書は聖書の中で唯一、三つの原語すべて、アラム語（カルデア語）、ヘブライ語、ギリシア語を含んでいる書です。ギリシア語とは、おそらくマケドニアの傭兵が持ち込んだであろう楽器などの名前の中に見られます。

ダニエル書では、ユダヤ人に対して特別な神の預言の目的に焦点が当てられているとき、ヘブライ語で書かれています。諸国と関連する神の預言の目的に注目が当てられているときは、当時のリング・フランカ（国際共通語）であるカルデア語（アラム語）で記されています。

アッシリアの興亡

ダニエル書を読むとき、思い出してほしいのが終わりの時代はダニエルの時代のようなということです。ユダヤ人たちはアッシリアを恐れていました。アッシリアは邪悪な者たちで、北の十部族を捕囚に連れ去った者たちです。彼らは最も残酷で、最も強大な異邦人でした。アッシリアがある時崩壊するとは誰も想像し得ませんでした。アッシリアの崩壊後、平和が到来したという錯覚がありましたが、それはすぐに消え去りました。彼らはバビロンとその急激な隆盛に直面しており、バビロンはアッシリアよりはるかに悪いものでした。そしてバビロンの古代のルーツは（霊的には確実に）バベルの塔まで遡るものでした。

メディア・ペルシャの興亡

バビロンは即座にして衰退しました。そしてダニエルが預言した通りにメディア・ペルシャが取って代わったのです。ペルシャ人たちは20世紀の後半になるまで、イランのシャー（王）が君臨していた時代はメディア人と手を組んでいました。イザヤの預言に話を戻すと、1970年代のシャーの衰退までずっと、ペルシャ人（イラン人）はいつもイスラム教国であるにも関わらずユダヤ人に好意的でした。イランのシャーは、イザヤが二度預言し（イザヤ44章28節、45章1節）孔雀の玉座についたクロス大王（コーレシュ *Kowresh*）の子孫だと語っていました。その時代までイラン人はユダヤ人に好意的だったのです。彼らの文化と言語はアラブ系ではなく、アラブ的文化でもありませんでした。彼らはゾロアスター教といって、ユダヤ人から影響を受け、部分的にゾロアスターに起源を持つ一神教を信じていました。

東方の賢者たちはメディア・ペルシャの王たちに仕えるメディアのチャブレンでした。それが東方の賢者たちの起源です。そしてゾロアスターから受けていた一神教のため、また

(ネブカドネザルに影響を与えた) 捕囚時のユダヤ人たちのため、彼らはイエスを拝みに来ました。終わりの日まで、このペルシャ人とユダヤ人のつながりはずっと続きます。

西ではソクラテス学派のギリシア人たちが一神教について最も理解していましたが、東で一神教に精通していたのはゾロアスター教徒たちでした。西のソクラテス学派のギリシア人たちはより後代ですが、ペルシャ人たち——ゾロアスター教徒のペルシャ人——はより深い理解を持っていました。

ギリシアの興亡

しかしペルシャ帝国は征服者アレキサンダー大王のために長くは存続しませんでした。しかしその後のアレキサンダー大王も長くは続きませんでした。彼はバローチスターン (パキスタン) の砂漠に到達し、当時知られていた世界の大半を征服しましたが、36歳の年齢で病にかかり死にました。彼の帝国は分裂し、4人の軍将に分けられました。その中で最も重要なふたりが、シリアとレバノン、ガラリヤ、中央イスラエルを取ったセレウコス、そしてエジプトと南イスラエルを取ったプトレマイオスです。歴史的に、また聖書においてもこのふたりが4人の中で最も重要です。

セレウコス朝はギリシア系スロ・フェニキヤ人で、フェニキヤ——レバノンやシリアのアレッポの周辺からツロやシドンに住んでいました。使徒のルカはユダヤ教に改宗したスロ・フェニキヤ人でした。

アンティオコス・エピファネスは聖書中で、最も重要な反キリストの象徴——反キリストを予兆する者のひとりです。彼はアンティオコス王朝と呼ばれるセレウコス家系の出身です。その家系にはアンティオコス1世、2世、3世と4世がいて、アンティオコス4世がそのアンティオコス・エピファネスでした。ギリシア語を話すユダヤ人たちは彼の名を、“狂った者”を意味する“エピマネス (*Epimanes*) ”と変えて馬鹿にしていました。

そこには北の王たちと南の王たちが敵対するという歴史的な状況が継続的に存在しています。アッシリアが滅亡すると、バビロン。バビロンが滅亡すると、メディア・ペルシャ。ペルシャが滅亡するとその次はギリシア。そして当時知られていた世界一帯で混沌が広がり、その混沌の中からローマが力を握りました。そしてその渦中であって、ユダヤ人が自分たちの地に戻りました。終わりの日にも同じことが起こります。

現代との類似点

ベビー・ブーム世代に育った者として、私たちにとっての大きな脅威とは“ソビエト連合”

でした。彼らがクリスチャンを迫害する者でした。彼らは神を信じておらず、独断的に無神論主義でした。私たちの世代でキューバのミサイル危機やベトナム戦争を覚えている人たちはソビエト連合が崩壊して、ベルリンの壁が崩れ落ちるなんてことは考えもしませんでした。ソビエトはまるでアッシリアのように崩壊したのです。そして世界平和の一時的錯覚をもたらしましたが、それはただより危険な敵、イスラムに遭遇するまでのことでした。

キューバ危機の中、私がまだ幼い子供でニューヨークにいるとき、ニキータ・フルシチョフがニューヨークにやって来たのを思い出します。彼は文字通り自分の靴を脱ぎ、国連の演壇に叩きつけて、「お前たちを葬ってやる！お前たちを葬ってやる！」と叫びました。彼はその通りのことをしたのです。数カ月のうちにブレジネフやスズロフ、旧ソ連政治局が彼を退陣させました。ウォッカを飲みながら、ボタンに手を置いているような狂った人を指導者の地位には置くことはできません。

ウォーターゲート事件の際、コルソンやヘイグ、キッシンジャーによると、ニクソン大統領は精神安定剤とアルコールで前後不覚だったようです。また彼はヨム・キプール戦争の最中にソビエトに対してレベル 3 の核の警告を与え、戦争をうまく利用し自分の首を政治的に救おうとしました。彼は数週間もたたないうちに退陣させられました。アメリカの上層部は彼に敵対したのです。精神安定剤とアルコールで前後不覚になりながら、ボタンに手を置いているような狂った人を指導者の地位には置けないからです。

イスラム世界はそのようには考えません。ヒンドゥー教世界もそのようには考えません。ヒンドゥー教徒は輪廻転生すると信じ、イスラム教徒は“シャヒード（殉教者）”になると考えています。イスラム教の中で唯一の救いの確信を持てるのはジハードの中で死んだ場合だけです。それゆえアッシリアが崩壊した後の世界が不安定であったように、同じことが今起こっています。イスラム系諸国が 50 ものメガトン爆弾を製造できる核分裂物質を保持している今、世界はより危険で不安定な状態へと突入しています。

なので世界の帝国はとてすばやい速度で興亡し、その最中でユダヤ人たちが自分の国へ戻って来ました。これはダニエル書で起こったこととまさに同じです。終わりの日を理解するにあたって、私たちはここで何が起こったかを理解する必要があります。

北の王たちと南の王たちのことを読むとき、気付いてほしいことがあります。最終的な争いは東西の争いではありません。それは南北の争いとなります。ダニエルの時代のような南北の争いが起こるのです。それがこれから起こることです。南北での争いが発生し、ローマ帝国が興った時代に見られたような種類の混乱が作り出されます。これは再び混沌の

中から起こることになるのです。

反キリストの象徴としてのポンペイウス

ダニエル 11 章の最初に登場する人物もまた 16 節で“麗しい国”に入ったことに注目してください。彼もまた偽りの契約を結びました。終わりの日に直面する問題のひとつは、多くの反キリストが登場するということです。したがって誰かが中東で和平協定を結ぼうとするとき、人々は「これがそれだ！」と行うことでしょう。

最終的な反キリストは違ったものとなります。彼は——この本文から見る限り——ふたりの性質を持っています。ひとりアンティオコス 4 世——エピファネスであり、もうひとり軍将のポンペイウスです。贖いの日の大祭司（またヘブル人への手紙での主イエス）以外に、誰かが至聖所に入るなら、それはいつでも反キリストの象徴です。ローマの軍将であったポンペイウスはそれを行いました。彼はローマ帝国の三頭政治を代表しており、ユダヤ人たちと契約を結び、その後ユダヤ人たちを裏切り、至聖所に侵入しました。人々は見落としてしまっていますが、彼は非常に重要で**主要な**反キリストの象徴なのです。

反キリストの象徴としてのアンティオコス 4 世

ハスモン朝時代はマカベア家とポンペイウスの時代の間にあたります。ハスモン王朝はマカベア家の子孫でした。それは繁栄をおう歌した時代で、ダビデの王座が復興すると考えられ、その時代においてメシアへの待望は大きく拡大しました。イエスの到来に向けた備えの大半がなされたのもハスモン朝時代でした。ハスモン朝は初めは正しかったのですが惨めな結果に終わりました。

アンティオコス 4 世は政治的支配を得るために文化と宗教を用いようと企みました。反キリストも同じことを行います。彼は何か多文化的で多信仰的なことを試み、アンティオコスの特徴を持ってやって来ます。ここで思い出してほしいのが、多くの人たちもアンティオコスの到来以前に似たようなことをしていたということです。しかし覚えておくべき重要なことがあります。それはダニエル書 11 章の 36 節まで、部分的ではあるが歴史的な成就が存在するという事です。アンティオコスは 36 節までのことを全て行いました。しかしその 36 節から 12 章に至るまで、書かれてあることを行った者は誰もいません。言い換えるならば、その反キリスト——獣——はアンティオコスの行ったことを再現し、その後に残りを行うということなのです。彼はアンティオコスが行ったようなこと——36 節に至るまでを行います、その後アンティオコス以上のこと、また残りの記述を成就するのです。

アンティオコスはユダヤ文化をヘレニズム化しました。彼はこの世で好まれている文化を

取り、それを妥協した神の民に着せたのです。彼らはもはや止めることの出来なくなるところまでその文化と親しくなっていました。

文化と宗教の使用

ギリシア世界にある全てのものは、ヘブライ世界にあるものと全くの正反対でした。思考方法にもギリシア的なものとヘブライ的なものがあります。ヘブライ的な思考は神のかたちをした男と女という考えに基づき、私たちは神の御姿に似せて造られているというものです。ギリシア的な思考は「人のかたちを取った神」という考えに基づいていました。「私たちは神々だ」というものです。ヘブライ人は一神教であり、ギリシア人は多神教でした。ヘブライ人は人が神のかたちに造られたとするのに対し、ギリシア人は「私たちが自分たちの姿に神を造る」としていたのです。彼らの神々は人間性を持ち、騙すことができ、嘘を付くことができ、怒りを鎮めることも出来ました。これがギリシアの哲学の根本的な考えであり、ヘブライ人が信じていたものと完全に正反対でした。アリストテレス主義（アリストテレスの哲学）とユダヤ・キリスト教ほど相互排他的な哲学はありません。

中世にはトマス・アクィナスが『神学大全 (*Summa Theologica*)』と呼ばれるものを書き、キリスト教をアリストテレス主義化しました。ユダヤ教にマイモニデス（ランバム）という人物が現われると、彼はユダヤ教をアリストテレス主義化しました。アリストテレス哲学とユダヤ・キリスト教の世界観より相容れないものは他にはありません。

神の経綸の中では三種類の人があります。ユダヤ人、異邦人、またユダヤ人と異邦人とでなる教会です。国々は欺かれています。そうすると聖書が“神の選民”と呼ぶ二種類の人たちだけが残ります。ユダヤ人と教会です。ユダヤ人はメシアを受け入れた忠実な残りの者たちを除いてすでに欺かれています。そして私たち、ユダヤ人と異邦人とでなる教会が残ります。

妥協の産物

教会の歴史の中で起こっていることは、このダニエルが預言した旧約新約間の時代に起こったことを反映しています。

ギリシア世界では同性愛と両性愛は文化的にその地域に根付いていました。それは性的に通常のものとして受け入れられていたのです。また子どもを性的に扱うことは社会的にくぶんか認められていました。一方、墮落した性——同性愛とレズビアン（ギリシアのレスボス島から）——は文化的に通常のものだったのです。

ギリシアの娯楽にはこの異教的宗教の哲学と娯楽との混合がありました。問題はスポーツにあるのではなく、オリンピックに対するギリシア的な考えに問題がありました。オリンピックはみだらでした。スポーツ選手が裸で競技をしていたのはただ生物学的な“裸”ではなく、性的に体を誇示するためでした。ギリシア世界に端を発し、後にローマ人が採用したもの——ローマ人に“剣闘士”というものがありますが——当時は暴力が人気のある娯楽として使われていたのです。

これらがアンティオコスがすべての者に押し付けようとしていたギリシアの文化的要素です。彼はすべての文化をヘレニズム的にしたいと思っていました。ヘブライ人がそれを容認した時、彼らは自分たちの上に災難を招きました。「別に良いじゃないか、それも取り入れて、あれも取り入れよう」。実際、裏でひそかに法律が作られ、彼らの信仰が違法となり、信仰をもはや実行できなくなるまでユダヤ人はそう考えていました。最終的に割礼は違法とされ、“カシュルット（食事規定）”も違法とされました。その後にトーラーの朗読も禁じられたのです。

トーラーの朗読が禁じられたために、この時期に“ハフタラー (*Haftarah*) ”が発達しました。彼らは預言者（ハフタラー）を朗読し始め、その週のトーラーの日課と関連するテーマを預言者から見つけようと試みたのです。これがハフタラーの起源です。

物事は徐々に禁じられていきました。そして神の民は取り返しのつかなくなるまで、またレビ人の神権政治の禁止を含む事態になるまで、少しずつ妥協していきました。レビ人の神権政治の祭司はツァドク人たちで、エゼキエル書によると彼らは良い祭司であり、ツァドクの子孫たちでした。しかし後にツァドク人たちは“サドカイ人”となってしまいました。始まりは良かったのに悪い者たちとなったのです。ハスモン王朝時代はマカベア家と共に始まり、後に墮落していきました。ユダヤ人たちは妥協し、様々なことが禁じられ、もう止めることが出来なくなったのです。

主な問題は異教徒たちにはありませんでした。主な問題は敵と協力したユダヤ人たちと、それを傍観し口を閉じていたユダヤ人たちにありました。

皆さんもご存じとは思いますが、ある首相がイギリスで「邪悪な者が勝利を得るには、善良な者が口を閉じさえすればいい」と語りました。彼の言葉は正しかったのです。1930年代に戻ってみると、当時の核軍縮、核兵器禁止運動（*CND*）のようなものはチェンバレン（元イギリス首相）の支持者たちでした。チャーチルと主にトーレイの国会議員からなる小さな集団は警告しました。「ヒトラーにこのようにベルサイユ協定を破らせてはならな

い。遅かれ早かれ、すぐにでも彼と戦わなければならなくなる」こう警告するとその人たちは好戦家だと見られるようになりました。その後、1千万人がヒトラーとの戦争を望まないという嘆願書を出し、スデーデン地方が融和政策のために明け渡されました。しかし彼のような人物は融和政策で止められるような者ではありません。核兵器禁止運動があった時と同じことです。「邪悪な者が勝利を得るには、善良な者が口を閉じさえすればいい」のです。しかし口を閉じたままですと、その人に何の“善いこと”があるでしょう？

第一マカベア書と第二マカベア書は聖典には含まれていません。しかし、靈感という領域から外されているとしても、それらは信頼性のある歴史書です。その本は旧約と新約の間の期間のユダヤ人の歴史を正確に告げています。（この説明をより良く理解するために第一マカベア書と第二マカベア書をお読みすることをお勧めします）

マカベア家はエルサレムの郊外にある“モデイン (*Modein*)”という村に住む祭司の家系でした。仲間のひとりが“メネラオス (*Menelaus*)”と呼ばれる者で、彼は敵と共謀したヘブライ人でした。マカベア家はメネラオスとアンティオコスの高官ひとりを暗殺しました。アンティオコスたちはユダヤの山々、“シルラー (*Shillah*)”と呼ばれるエルサレムの近く、エルサレムと現代のテルアビブの間、または“海”とエルサレムの間の地域を取りました。反キリストが天幕をその同じ地域、シルラーに張ると預言されていることは興味深いことです（ダニエル 11 章 45 節）。もうひとつの類似点は反キリストとマカベア家がどちらも小さな集団から始まり、次第に勢力を増していくことです。

注目してください。マカベア家はひとりの父親と 5 人の息子たち、エレアザルとヨハネ、ユダ、マカベア、マッタティアスでした。彼ら 5 人の息子のうち 2 人が内部から裏切りました。終わりの日もこのようになります——兄弟は兄弟に逆らって立ち、多くの者が倒れ、互いに裏切り合います（マルコ 13 章 12 節）。

彼らが最初に殺したのはセレウコス朝の者ではなく、ユダヤ人の共謀者でした。小さな一団にいた人々が党派行動——ゲリラ戦争に参加し始めました。そして彼らは山々からゲリラ戦略を繰り広げていきました。彼らは下って来てセレウコス朝を攻撃し、また戻るといふ戦法を取り、それが延々と続きました。そこには多くの謀反や陰謀がありました。しかし次第にセレウコス朝を消耗させ、彼らを打ち破ったのです。

神殿を冒とくする

第一マカベア書の 1 章では神殿が冒とくされたことが記されています。祭壇の石はひどい仕打ちを受けました。アンティオコスによって豚がその上でささげられたのです。そして

アンティオコスがゼウス像を建て、自分の容姿をゼウス像にかたどりました。ゼウスというのはギリシア語の“セオス (*Theos*) ”が変化したものです。ほぼ同じつづりで、ゼウスは“神”を意味する“セオス”から来しました。彼は自分の容姿をかたどったのです——人間が偉大な神と同一視されようとしていました。シオンの山に敵対していたのはこの時はオリンポス山なのです。

マカベア家はエルサレムを解放した後に悩んでいました。「私たちはこの神殿の石をどうすべきだろう。それは“メイ・コデシュ (*mei qodesh*) ”——“聖められたもの”だから投げ捨てることはできない。だからといって豚がささげられたのだから、いけにえには使えない」そこで彼らは祭壇 (ミツァベアク) を解体し、ミシュナによるとその石をソロモンの廊の外に積上げたと言われています。そして彼らはハヌカ、再奉献の時にメシアあるいは預言者エリヤ (エリヤフー・ハナヴィー) が来てその石をどうするか教えてくれると信じていました。「メシアが来られるとき、その石をどうしたらいいか彼はご存じだ。私たちがこれを投げ捨てることはできない」そういうわけで彼らはもうひとつの祭壇を建てました。

アンティオコスが力を得たのは霊的な欺きと神の民のヘレニズム化——人気のある文化の使用によりました。人気のある文化に乗じるというのは道德性を妥協するという意味です。このように事態は神の家で律法を遵守するあらゆるユダヤ人にとって、忌きらうべきものとなり、神のことばを朗読することが違法とされました。

新約聖書は教会を少なくとも七回“神殿”と呼んでいます。ギリシア語には神殿を表す言葉がいくつかあります。“ナオス (*naos*) ”、“ヘイカル・ユーダイオス (*heikal ioudaios*) ”、“ヒエロン (*hieron*) ”などです。

エルサレムに神殿を再建しようとしている人たちがいるのを私は否定しません。私は神殿が再建されたいと言いたいのではなく、またその中に像が建てられないと言いたいのもありません。私がいつも言っていることは物質的なものが霊的なものを反映しているということです。イエスさまが十字架上で亡くなられた時、“ヴェロン (*velon*) ”——神殿の幕——が上から下まで裂けました。実際の文字通りで物質的な出来事が、文字通りの物質的な神殿で——超自然的なことが起こったのです。しかしそれが重要なことではありません。最も重要なことはそれが意味していたこと、罪深い人間が聖い神からもはや離されていないということ、また今私たちが大祭司の血を通して御父に近づくことができるということです。神殿が再建されるなら——そうされたいと言っているのではありませんが、また像が建てられるなら——またそれが起こらないと言いたいものではありませんが、それはただキリスト教界で反キリストが崇拝されていることの反映でしかないのです。そしてそれは今行われている方法でやって来ます——ヘレニズム化です。現代、神の民は人気のある文化によって

のみ込まれてしまっています。みなさんの周りを見渡してください。

福音の中から世を締め出す

ギリシア文化に何が起こったのでしょうか？同性愛と両性愛が文化的に流行し、実際、彼らはそこに宗教的な装飾を施していました。神殿における神殿娼婦は“ヒエロス・ガモス (*hieros gamos*) ”と呼ばれていました。“ヒエロス・デルフォス (*hieros delphos*) ”は宗教指導者でした。

すでにスウェーデンとカナダでは、ローマ 1 章やレビ記など、性的な罪や同性愛を非難する聖書箇所を公で朗読すると“差別文書”だと呼ばれる動きが出ています。当然、コーランを読むことができる一方で、聖書が違法となっていくのです。

これがまさにマカベア家の時代に起こっていたことです。暴力が娯楽として用いられていました。聖書は多くの箇所でも暴力について語っていますが、決してそれを称賛してはいません。それはただ事実を描写しているだけで、良くて必然悪だと書いていますが、聖書が暴力を称賛することは決してありません。社会全体が今そのようになりつつあります。教会が文化と慣れ合っているならば社会の中でどのように塩と光になれるのでしょうか。

「邪悪な者が勝利を得るには、善良な者が口を閉じさえすればいい」去年の 4 月、レント（受難節）の時期に私はキリスト教系雑誌を読んでいました。その本でさまざまなキリスト教のリーダーがレントに何を読むかと聞かれていました。アルファ・コースを運営するニッキー・ガンベル (*Nicky Gumble*) は、同性愛者を任命するようなドルイド団員（ドルイド教…キリスト教以前のイギリスの異教）ローワン・ウィリアムズ（英国国教会主教）の著書を読んでいると答えていました。このような人がイギリスを再び福音化してくれると皆が期待しているのです。ホーリー・トリニティー“精神病院”（偽りバイブルであるトロントブレッシングで、酷い不品行に陥った運動）で同性愛者を任命するドルイド団員の本を勧めるような人を、皆が良い人物だと考えているのです。これはどんなに不快なことで、人々の基準はどんなに腐ってきたのでしょうか。それは留まることを知りません。これがまさにマカベア家が現われた時に起こっていたことなのです。

マカベアたちは「もうこんなことは十分だ！」と言いました。そして最初に倒した相手は共謀者メネラオスでした。この国でイエス・キリストの福音に対する最も危険な敵はキリストの十字架の敵と協調する、福音派たちです。

まさにこれがマカベア家の時代に起こっていたことです。反対し、立ち上がり、間違っ

いると言う者たちは、奇襲作戦を行う小さな集団でした。そして次第に他の者たちが突然出てきて、彼らに加わったのです。私はあらゆる場所でこのことが起こるのを見ています。人々は住んでいる地域で良い教会が見つからない為、家々に集まり、イギリスでは地元の貸会場などに集まっています。

偽善者が加わる

しかしながら第二マカベア書 11 章 33 節から 35 節によるとまた別のことが起こりました。多くの者が偽善的にマカベアたちに加わったのです。誰かが自分たちの反対していることに反対していても、その人が自分たちの支持しているものを支持しているとは限りません。ヴァンガード誌 (*Vanguard*) や、ベレアン・コール (*Berean Call*)、アンダースタンド・ザ・タイムズ (*Understand the Times*)、もしくはモリエルのような間違いを指摘している人々——立ち上がってあることを非聖書的だという人は誰でも共通の問題を抱えます。私たちが引き寄せる 90 パーセントの人は誠実ですが、10 パーセントはいつも不満を持ち、どんな教会でも文句を言う人たちなのです。

何を支持しているかを知るには、その人が反対していることを知るしかないと言う人たちがいます。ですが教会や交わり、また奉仕を、自分たちの反対している事柄の上に建てることはできません。あるものがくだらないと私たちは知っていますが、それでは何を支持しているのかという問題が出てきます。アルファ・コースが非聖書的であることは知っていますが、私たちは何を支持しているのでしょうか？これが問題です。

教えを識別する（ディサーンメント）ミニストリーを行っているからといって、ただ何が間違っているかを非難するだけで正しいことを指摘しない人たちには警戒すべきです。そういう人たちは伝道もせず、宣教にも関わらず、聖書の学びも行いません。そのような人たちに注意してください。教えの識別をする奉仕でも良いものと悪いものがあります。キリストの体を再建しようとするインターセッサーズ UK (*Intercessors UK*) などは良い団体です。反対していることの上に何かを建て上げることは決してできません。奉仕はただ自分たちの支持している事柄の上にだけ建て上げることができます。

真理の知識が、間違った教えに対する最初で最大の武器であることを思い出してください。しかしながら、人々が真理を少しも知らないために教えを識別する奉仕が必要なのです。もし人々が聖書を知っていたならニッキー・ガンベル（アルファ・コースの創設者）が間違っていることが分かったでしょう。ベニー・ヒンやクレフロ・ドラー (*Creflo Dollar* 繁栄の説教者) を見抜けたことでしょう。もし人々が真理を知っていたなら、彼ら自身で間違いを識別できたでしょう。しかし人々が真理を知らないため信仰を守ることが重要となっているのです。

思慮深い人たち

しかしながらマカベア家の時代にも、終わりの日と同じような人たちがいました。思慮深い人たちは多くの人を悟らせます（ダニエル 11 章 33 節）。真理が教えられ、守られている集会に行き、そこでテープなどを入手し家に持ち帰り、そのコピーを作っておかしな教会にいる人たちに配りましょう。思慮深い人たちは多くの人を悟らせるのです。

言い換えると、エキュメニカル運動や同性愛の聖職者のようなものを見るとき、忌むべきものはもうすでに神殿に据えられているということなのです。みなさん、エルサレムとキリストのからだを注意して同時に見ておいてください。

神殿の丘にさえコーランからの引用で、「アッラーは生まれたのではなく、誰かを生んでもいない——神には子がない」と書かれています。神殿の丘にはすでに忌むべきものがあり、それは教会の中にもあるのです。

小さな集団

これがハヌカの背景です。それがかつて起こったことであり、それが今起こっていることです。したがってハヌカには伝統的、また歴史的、終末的な側面があります。

終わりの日にも同じことになります。マカベアたちのような小さな集団が立ち上がります。思慮深い人たちは多くの人を悟らせ、神はこの地滑りに持ちこたえる軍隊を立ち上げられます。多くの者が偽善的に加わり、彼らの中で裏切りが起こります。しかし終わりに彼らは勝利を収めます。マカベア家は勝つのです。それはダニエルにより預言されていました。

私は次のことを言うことができます。多くの悪いことが起こるでしょう。二匹の獣がやって来ますが、聖書の最後の本を読んでも——終わりに私たちは勝利を得ます。これから起ころうとしていることはかつて起こったことなのです。

マカベア家、イエス、ダビデ王——彼らはみな同じ戦略を用いました。サウル王、セレウコス朝、サンヘドリン、ローマ人（ヘロデ党）の下に状況は本当に悪化しました。物事が本当に悪くなる時、神は小さな集団をもとに新しいものを立ち上げ始めます。

これがハヌカ——光と奇跡の祭りです。

ヘブライ語では“ネシーム・ベ・ニフラオット (*Nesim v' niflaot*) ”と呼ばれます。

ユダヤの祭日の時期

ヨハネ 9 章でイエスはメシアであることを証明する奇跡を行いました。彼は生まれつきの盲人の目を開けたのです。

『またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。』」（ヨハネ 9 章 1 節－2 節）

「誰が罪を犯したのですか。彼ですか、それともその両親ですか？」

レビ記 23 章には、ユダヤ人がエルサレムに祝いに来なければならない巡礼祭の記述があります。春の祭りは“ペサハ（過越の祭り）”と“ハグ・シャブオート（週の祭り、ペンテコステ）”であり、秋には仮庵の祭り——“ハグ・スコット”がありました。一方でイエスさまの時代にハヌカは（トーラーでは義務とされてはいませんが）多くのユダヤ人がエルサレムに来て祝う第四の祭りとなっていました。

ずっとガリラヤから歩いて来て、一旦戻り、そしてまた数週間後にハヌカのために戻って来るよりも、イエスさまはエルサレムでその時期を過ごされたことでしょう。当時は徒歩で来るには長い道のりでした。

これがユダヤの祭りの期間でした。これが秋から冬の初めまで続きました。多くの祭日が重なっていたのです。

盲目の問題

異教の世界では読み書きの能力はただ貴族だけのものでした。しかしユダヤ人は神を礼拝するためにすべての者がトーラーを読む必要がありました。それゆえ盲目に生まれるということは呪いとみなされていたのです。

『弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。』」（ヨハネ 9 章 2 節－3 節）

「誰が罪を犯したのですか。この人ですか、それともその両親ですか？」と聞かれ、イエスは「そのどちらでもない」と言われました。

悔い改めない罪は第一コリントや詩編 32 編にあるように、病気を引き起こす可能性があります。しかしある病気や生まれつきの異常が何らかの罪の結果に違いないというのはおかしいことです。イエスは明らかにそうではないと言われました。

イエスをご自分を世の光として提示することによりハヌカのテーマを展開し、ヨハネ 10 章でのハヌカの祭りにつながられました。ヨハネの福音書は四福音書の中でも最も祭りに関心を置いているもので、イエスを過越の羊として捉えています。イエスが例祭の成就であることがヨハネの福音書において最も明らかにされています。ヨハネの福音書の大半を通してイエスがエルサレムに行くところであったり、そこから来るところ、またそこに行く準備をしているか、またそこから戻ってきたところであるということが書かれています。ヨハネの関心はエルサレムにあり、イエスが例祭のメシアによる成就であることを強調しています。ここでイエスは人々が光に注目していたので、光というテーマを持ちだされました。その光はユダヤ人により国々の光と呼ばれていました。

『わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行なわなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。わたしが世にいる間、わたしは世の光です。』(ヨハネ 9 章 4 節-5 節)

ユダヤ人たちは“オール・ゴイム (*owr goyim*) ”、国々の光、世の光と呼ばれるよう召されています。イエスはつばきで作った土を取り、その若者の目に塗りました。

『イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。「行って、シロアム（訳して言えば、遣わされた者）の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。』(ヨハネ 9 章 6 節-7 節)

シロアハの池に行って洗いなさいと言われました。“シロアハ”は“使徒”と同じ言葉であり、「遣わされた者」という意味です。シロアムの池はヒゼキヤの水道の終わりにありました。キデロンから水が引かれ、水道を通過してシロアハの池まで流れていました。それは現在でも当時のままの場所にあります。そこを歩いて通り抜けることもできます。それは“遣わされた者”です。「シロアハの池に行って洗いなさい」

『彼は答えた。「イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池

に行って洗いなさい』と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。』(ヨハネ 9 章 11 節)

奇跡による救いのメッセージ

イエスの癒しの奇跡は次のように理解される必要があります。唯一メシアだけができる奇跡がありました。それは盲人の目を開けたり、耳が聞こえない者の耳を開くようなことです。いったん神経組織が死んでしまうとそれらはもう再生できません。もし視神経が死んでしまうとその人は二度と見ることはできません。現代でも神経組織を再生するには神の御手を必要とします。

イエスさまは 3 つの理由で奇跡をなされました。第一はもちろん神の憐みのためです。第二に、奇跡はご自身がメシアであることの証印でした。第三にそれは救いを何らかの形で説明するものとなっています。

ヨハネの福音書に書かれてある癒しの奇跡はいつも「救い」を説明しています。ヨハネ 5 章でイエスさまは足なえに、「床を取り上げて歩きなさい。もう罪を犯してはならない」(ヨハネ 5 章 11 節-14 節)と言われました。これは罪が足なえを引き起こしたケースでした。イエスさまはなぜ彼がもはや床を必要としないのに「床を取り上げなさい」と言われたのでしょうか。それは床が肉体を縛り付けている木片であったからです。イエスさまが言われていたことは「自分の十字架を取り、十字架に付けられた生活をしなさい。もう罪を犯してはならない」ということでした。それが象徴的にミドラッシュを用いてイエスさまが言われていたことです。その人はもはや床を必要とはしませんでした。私たちはみな十字架を手取るまで足なえです。私たちは十字架を取り上げるまで御霊にあって歩めません。そうです、私たちはイエスさまを見るまでみな盲目なのです。

イエスさまがそこで「シロアハの池に行って洗いなさい」と言われたことに注目してください。これはバプテスマの象徴です。目が見えるようになることはいつも主への従順さと比例しています。神のみこころを行えば行うほど、あなたの目ははっきりと見えるようになります。一度にすべては分からないでしょう。人が生まれるとすぐに目は見えません。誰かが新生してもすぐに見えるようになるわけではありません。しかしバプテスマは人の目を開かせるものです。キリストと共に埋葬され、共によみがえることを理解するとき、人は自分の救いを理解し始めます。

未信者により退けられる

イエスさまは続けてこのテーマを展開されます。この少年は少なくともバルミツバの年齢でした。なぜならその両親がもうおとなだと言ったからです。

『そこで両親は答えた。「私たちは、これが私たちの息子で、生まれつき盲目だったことを知っています。しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。』(ヨハネ 9 章 20 節-21 節)

家族がその人を退けたことに注目してください

『近所の人たちや、前に彼が物ごいをしていたのを見ていた人たちが言った。「これはすわって物ごいをしていた人ではないか。」ほかの人は、「これはその人だ」と言い、またほかの人は、「そうではない。ただその人に似ているだけだ」と言った。当人は、「私がその人です」と言った。』(ヨハネ 9 章 8 節-9 節)

人々は「あの人だと思ったが、そうではない。誰かその人に似ているだけの者だ」と言いました。彼を知っていた人たちは分かりませんでした。ある人は当人だと言い、ある人はそうではない、ただ似ているだけだと言いました。ですが彼は「私がその人です」と言い続けました。

未信者たちはいつも誰かが新生したときにそのように反応します。もはや彼らにとっては同じ人ではないのです。「やつのはずがない。ジェイコブ・ブラッシュだって？あいつはコカイン中毒者だったじゃないか。おれはやつからコカインを買っていたんだ！あいつは高校でドラッグをやっていた。あいつじゃない。ただあいつに似ているだけだ」

未信者はいつもそのように考え、私たちではないというのです。もう昔の自分ではないのです。彼らは私たちがイエスを知るようになると、いつも私たちのアイデンティティーに困惑します。

一方、家族でさえも困惑していました。ここ思い出してほしいのがこれはユダヤ的な環境であるということです。22 節で彼の両親はユダヤ人のことを恐れたのでそう言ったとあります。

『彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。そのために彼の両親は、「あれはもうおとなです。あれに聞いてください」と言ったのである。』(ヨハネ 9 章 22 節-23 節)

ヨハネの福音書に関していつも指摘しているように、この“ユダヤ人 (*Ioudaios*) ”という言葉には、大きな翻訳の問題があります。それは“ユダヤ人”である人々という意味ではありません——**全員**が“ユダヤ人”であり、イエスも“ユダヤ人”でした。それはエルサレム内外の宗教組織、ユダヤにいた人たち、支配層たちのことでした。現代のイスラエルでもハイファやテルアビブより、エルサレムに宗教的ユダヤ人や宗教的影響の多くが見受けられます。それは“ユダヤに住んでいる者たち”宗教組織——サンヘドリンや支配層の人たちのことです。

そしてイエスさまはその人の目を開きました。その後、追放されたその人を見つけました。

『イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」』(9章 35節)

イスラエルではこのようなジョークがあります。といってもジョークではありませんが、“フラム (*frum* 正統派ユダヤ人)”が救われると家族はその人の葬式をします(もちろん本人が不在で)。しかしイスラム教徒が救われたら同じように葬式がなされるのですが、この場合当の本人は(墓棺おけに入れられて)その場にいるのです。

ここの箇所ではどうでしょう？イエスは彼を見つけ出しました。私たちの家族は私たちを退けるかもしれませんが、イエスさまはあなたを見つけ出されます。

意図的な盲目の結果

イエスさまは次にその注目をパリサイ人に向けました

『イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と断言しています。あなたがたの罪は残るのです。』(ヨハネ 9章 41節)

ヨハネ 9章でイエスさまはパリサイ人の意図的な盲目と、この若者の不慮の盲目とを比較しています。私たちみなも盲目に生まれました。しかし神の観点から盲目であることと、**自分から**盲目になることの間には大きな違いがあります。不慮の盲目はいつでもキリストの憐みを引き起こします。しかし意図的な盲目はいつでもキリストの**裁き**を引き起こします。

このことがハヌカの備えをしています。それはハヌカの祭りがマカベア家たちの時代に遡るからです。何が起きているか分かるでしょうか。人々はみことばの朗読を禁じ、“ブリット・ミラー（儀式的な割礼）”の慣習を違法とし、異教のものを教会に持ち込んでいました—これが偶像礼拝となったのです。現在何が起きているか人々は分かっているでしょうか。

偽り者のために真実の者を退ける

そしてイエスは羊飼いとしての話しをしました。これは詩編 23 編へさかのぼります。ここでマカベア家のことがほのめかして語られています。なぜなら彼らこそが真実の羊飼いだったからです。聖職者たちの大半が民と同じ道を歩んでいました。

『しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。』（ヨハネ 10 章 5 節）

ヨハネの福音書のひとつの特徴はどの書簡、パウロの書簡よりも、反キリストに関する記述が多いことです。この福音書では反キリストについての記述があり、ヨハネの手紙では反キリストに言及し（第一ヨハネ）、黙示録では反キリストを完全に説き明かしています。この福音書では、イエスの不法の人に関する発言を多く引用しています。『ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです』（ヨハネ 5 章 43 節）「あなたたちはわたしを退ける。しかし偽のキリストには従っていく」と言われました。最終的に人々は反キリストについて行きます。反キリストはそのような人々と契約を結び、彼らを欺きます。

それはともあれ、ヨハネはいつも反キリストに関する事柄をほのめかしていました。これは一般的真理ですが、同時に終末的な真理でもあります。「本当にわたしのものならば、キリストと反キリストの違いを知るようになる」

『「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門から入る者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。』（ヨハネ 10 章 1 節－4 節）

何事でもイエスさまのものであるかそうでないかは判別可能です。もし聖書を信じ、聖霊

を頂いているなら、あるものが真実かどうか分かります。『わたしの羊はわたしの声を聞き分けます』（ヨハネ 10 章 27 節）

『イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。』（ヨハネ 10 章 6 節）

『このみことばを聞いて、ユダヤ人たちの間にまた分裂が起こった。彼らのうちの多くの者が言った。「あれは悪霊につかれて気が狂っている。どうしてあなたがたは、あの人の言うことに耳を貸すのか。」ほかの者は言った。「これは悪霊につかれた人のことばではない。悪霊がどうして盲人の目をあけることができようか。』（ヨハネ 10 章 19 節-21 節）

イエスの霊にあつて働き、彼の特徴を持ち奉仕しているなら、自分から盲目になっている者たちにこのようなことを言われるようになります。

ハヌカの祭りにおけるイエス

22 節を見てください

『そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。』（ヨハネ 10 章 22 節）

これがハヌカの祭りです。そしてここで「そのころ」と時が特定されています。9 章、10 章で書かれてあることが道備えとなっているのです。

『時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。』（10 章 23 節）

現代、ソロモンの廊はだいたいの神殿の丘のアルアクサ・モスクの東に位置しています。それはキデロンの谷がチロペオンの谷に変わる場所を見下ろす、南西の角です。そして、その場所で使徒ヤコブが後に殉教しました。上にある塔から投げ落とされたのです。

『それでユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください。」イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行なうわざが、わたしについて証言しています。』（ヨハネ 10 章 24 節-25 節）

この「わざ」という言葉は“セメイオン・ミプラオット (*semeion mipla'ot*)”“しるしと不思議”を暗に示している可能性があります。「これらがわたしについて証言する」と言われました。これはヨハネ 5 章に戻ります。5 つのものがイエスについて証言をしています。

『しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです。」ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。』(ヨハネ 10 章 26 節-32 節)

ここで知っていてほしいのが、ミシュナを読むと当時の神殿に存在したものを全部知ることができるということです。ソロモンの廊にあった唯一の石はもちろん、解体された祭壇の石でした。

ダニエル書ではアンティオコス・エピファネスとマカベア家に起こることが預言されていました。アンティオコスは反キリストの主要な予型であり、神殿の中のゼウス像の前で豚をほふりました。そのギリシアの神に彼は自分の身体的特徴を加えました。これが反キリストの主要な象徴のひとつです。そして祭壇——石で出来た祭壇(ヘブライ語では“ミツァベアク *mizbeach*”)——は聖なるものでした。ユダヤ人たちはその石を捨てることができませんでした。といってもその上でいけにえを捧げることもできませんでした。なぜならそれは——非コシエルの動物である——豚の血で汚され、他の神にいけにえが捧げられたからです。彼らはそれを捨てるべきか分からず——聖なるものであったので捨てることができず——かといってそれをもはや使用することもできませんでした。古い祭壇が汚されたために新しい祭壇を作る必要があったのです。それゆえ彼らは神殿の中に石を積み、メシアが来るのを待っていました。

ユダヤ人はハヌカの祭りにおいて、メシアがやって来てその石をどうするべきか教えてくれると信じていました。そしてそのハヌカにメシアがやって来ましたが、彼らはその石を一体どうしたのでしょうか？それを取り、メシアに向かって投げつけようとしたのです。ミシュナの記述によれば、それらの石が祭壇の石でないと考えerことは困難です。なぜなら

ソロモンの廊に他の石が無かったからです。そしてミシュナは事細かにすべてを記録しています。それゆえ歴史的な記録に基づくと、彼らの投げようとした石が祭壇の石であった可能性が高いのです。

『ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒涇のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、おまえたちは神々である』と書いてはいないか。もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから、『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒涇している』と言うのですか。』(ヨハネ 10 章 31 節-36 節)

退けられることへの反応

ここで「おまえたちは神々だ」という考えを理解する必要があります。これはヘブライ語の”エル”や”エロヒム”から来ていることから、翻訳する最善の方法は英語でいえば頭文字を小文字の“g”で書くことです。神は全宇宙の神です。神は私たちが神の御姿に造られ、私たちが被造物の上に支配させるようにしました。それゆえ、いうならば私たちが被造物の上にいる神 (*a god*) であり、創造主である神に従属し、神の副官として振る舞うということなのです。しかしその権威がいったん罪によって失われると、サタンがこの世の神となりました(2コリント4章4節)。しかしサタンは“神 (*God*) ”ではありません。私たちは文脈を理解する必要があります。人の代わりにサタンがこの世の神となりました。言い換えるならば、キリンにとって人間は神 (*god*) なのです。私たちは支配権と力を持っています。人間とキリンの関係は、神と私たちの関係のようです。私たちは神が創造主であることを知っています。これが“おまえたちは神々だ”という意味であり、ケネス・コープランドやポール・クラウチが教える“小さな神”というものではありません。

さて、人は神の御姿に似せて造られましたが、イエスは神の御姿に似せて造られたのではありません。イエスは神が人となられたお方です。御父の満ち満ちたさまが彼の体に宿っていました。神がどのような方かを知りたいのなら、イエスを見てください。

律法、トーラーの下では**神について**知ることはできました。ユダヤ人はトーラーを通して**神に関して**知ることができました。旧約聖書の中で**神について**知ることはできます。ですが新生することにより新約聖書を通して**神を**実際**に**知ることができます。**神について**知ることと、**実際に神を知る**ことの間には大きな違いがあります。イエスを知っているなら神

を知っています。あなたが知りたいほどには神を知ってはいないかもしれませんが、後を知るようには分かっていないかもしれませんが、あなたは確実に神を知っています。そして天に行く以前でさえも、私たちはみな神をよりよく知る機会が与えられています。

一方、イエスキリストは「わたしが神の子である」という用語を使われました。これはヨハネ 8 章で彼が“エゴ・エイミー (*ego eimi*)”——“わたしはあるという者”という言葉を使ったことに戻ります。これはヤハウェが出エジプト記でモーセを通して、ヘブライ人たちにご自身を示していたまさに同じ方法であり、そのことのために人々は彼を石打ちにしようとした。

『もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じないでください。しかし、もし行っているなら、たとえわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用してください。それは、父がわたしにおられ、わたしが父にいて、あなたがたが悟り、また知るためです。』(ヨハネ 10 章 37 節-38 節)

イエスはここでヘブライ的な“アハドゥート (*achdut*)”という概念、“シェマー (*Shemah*)”からの一致というものを論じています。その言葉は結婚の結合について、結婚の完成、ひとつの体になることに関して使われるものと同じです。

『そこで、彼らはまたイエスを捕らえようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた。そして、イエスはまたヨルダンを渡って、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行かれ、そこに滞在された。多くの人々がイエスのところに来た。彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行なわなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた。』(ヨハネ 10 章 39 節-42 節)

神学を比較する

これはしるしと不思議に関係するヘブライ人の祭りでした。それではイエスキリストの神学と、現代の教会の神学とを比べてみましょう。

あるものが故ジョン・ウィンバーにより始められました。彼はケビン・スプリンガーと共著で『力の伝道 (*Power Evangelism*)』という本を書きました。そしてその著書はホーリー・トリニティー・ブロンプトン教会 (ロンドンの英国国教会) のニッキー・ガンベルを含む人たちに影響を与えました。その前提となる考えは、未信者がしるしと不思議を見れば信じるようになるというものです。それは悪魔的な力と神の力の衝突で、もし彼らがし

るしと不思議を見れば信じるというのです。彼らにとってしるしと不思議が信仰の鍵なのです。

現代、偽物のしるしがとんでもなく多く、奇跡の多くが医学的に証明されていないという問題を差し置いても、その考えは真実といえるのでしょうか？しるしと不思議のために人は自分の人生をキリストに明け渡すでしょうか？もしそれが本当ならばイエスキリストはなぜ『どのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか』（ヨハネ 10 章 32 節）と言われたのでしょうか？彼が盲目の人を癒したときの人々の反応はどうだったのでしょうか？人々はそれでも彼を殺そうとしました。もし、しるしと不思議が信仰の鍵ならばヨハネ 10 章のハヌカをどうやって説明できるでしょうか。覚えているでしょうか「これらのしるしは伴う」（マルコ 16 章 20 節）のです。

イエスが当時ただすべきだったことはヘロデのためにショーを行うことであり、そうすれば十字架にかけられずに済みました。ただ“ケニーやベニー”のようなことをすればよかったのです。つまりショーです。『悪い、姦淫の時代はしるしを求めています』（マタイ 12 章 39 節）人々がケニーやベニーのもとに群がっているとき、またホーリー・トリニティー・ブロンプトン教会やケンジントン・テンプル（エリムに属するロンドンの教会）に通っているのを見る時、それがまさに悪い、姦淫の時代がしるしを求めている実例なのです。（これらの教会はイギリスでトロンブレッシングを広めています）

私は終結論者（*Cessationist*）ではありません。私は御霊の賜物すべてを信じ、奇跡があると考えています。御霊の賜物が使徒の時代に終わったという考えはひとつの教理的間違いです。神は今も奇跡をなされます。神は今でも人々を癒します。この世界には本物と偽物があるのです。今日、私たちが見る大半のものがインチキだからといって、本物が存在しないわけではありません。私はこれまで本物を見たことがあります。偽物を見るよりは何も見ないほうがましです。「これらのしるしは伴う」と聖書にはあり、しるしに焦点は当てられていません。

イエスは一度も「ミラクルクルセード」を開かれませんでした。彼は奇跡を起こされましたが、ミラクルクルセードではありません。イエスはまた一度も「癒しのクルセード」を開かれませんでした。彼は癒しを行われましたが、癒しのクルセードではないのです。イエスはただ「悔い改めのクルセード（伝道集会）」を開かれました。

人々が信じる場所

人々はどんな場所で信じたのでしょうか。ショーを見た場所でしょうか？しるしを見た場所

でしょうか？それとも奇跡を見た場所でしょうか？違います。ヨハネは何の奇跡をしなかったにも関わらず、イエスについて語った言葉のすべてが真実でした。

信仰は見ることから始まるでしょうか？違います。正しいのはジョン・ウィンバーではなく、ジョン・ザ・バプテストです。信仰は見ることからやって来るものではありません。『信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです』（ローマ 10 章 17 節）

イエスが公の奉仕に入られたとき最初に行ったことは、ヨルダンに行き、バプテスマを受けることでした。なぜヨルダンだったのでしょうか？私たちはヨルダンの持つイメージと、ユダヤ人にとっての意味を理解する必要があります。そこはヨシュアが約束の地に入った最初の場所でした。言い換えると、物事がずっと悪い状態ならば最初に戻らなければならないということなのです。

『彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行なわなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた』（ヨハネ 10 章 41 節－42 節）

人々が信じるのは奇跡がある場所ではなく、みことばが宣べ伝えられる場所です。しるしと奇跡はこれまでも、また現在も信仰の鍵ではありません。

間違った考え

ユダヤ人たちはハヌカに関して間違った考えを持っていました。言い換えるならば“奉献”を取り違えていたのです。ハヌカはただ単に“奉献”を意味するだけではありません。それは“再奉献”なのです。

神殿は汚されました。人々は神殿が再奉献されるまで信じません。人々は真実の福音が宣べ伝えられるまで信じないのです。

ヨハネは何の奇跡も行いませんでした。「どのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか」人々は間違っていました。彼らの欲していたこと——ユダヤ人の欲していたこと——はマカベア家の特徴を持ってやって来るメシアでした。そしてマカベア家がギリシア人を除いたように、ローマ人を除いてほしかったのです。イエスが政治的なメシアで、その時代に王国を与えてくれると考えているうちは、彼らは喜んで支持していました。そしてイエスが右側にあったアントニヤの要塞に向かわず、左側に向かっ

て行き神殿内の両替人たちを追い出すと、すぐさまその同じ群衆は「十字架につける！」と叫び始めたのです（ルカ 23 章 21 節）。

イエスはローマ人を気にかけていませんでした。神はいつでも彼らを取り扱いになられるからです。イエスは神の言葉を金のために用い、子羊の血を不正に売る者たちを気にかけておられました。マカベア家たちはアンティオコスを気にかけていませんでした。彼らはメネラオスのことを気にかけていたのです。「メネラオスを取り除け。その後に神はアンティオコスを取り除くのを助けてくださる」それは今も同じです。ニッキー・ガンベル（アルファ・コースの開発者）を取り除けば、その後に神はアラン・ウィリアムズ（英マンチェスター大学の神学教授）や同性愛の聖職者などを取り除くのを助けられます。

取り除くべきは共謀者なのです。「ローマ人を取り除きなさい！」違います。あなたがたは分かっていません。なぜローマ人がここにいるのでしょうか。マカベア家が行ったように私にしてほしいのですか。アンティオコスはどのようにして権力を握ったのでしょうか？それは父たちが罪を犯し、父祖たちが共謀したからです。またそれが間違っていると分かっている者たちが立ち上がらず、口を閉じたからです。マカベア家がギリシア人を除いたように私にローマ人を取り除いてほしいのでしょうか？ローマ人はどうやってここに来たのでしょうか。同じ道を通ってです。ローマ人は、人々が立ち上がらずに口を閉じ、彼らに共謀したからここにいるのです。ヘロデ党の者たちは実際ローマ人と共謀しました。まずメネラオスやヘロデ党の者、サンヘドリンなどを取り除くのです。

今日も同じ

そうです。現代も全く同じです。イエスは小さな集団から始められました。マカベア家もそうでした。彼らは小さな群れから始まりました。イエスはローマ人に対して宣べ伝えませんでした——全ての人がローマ人がどんな民であるかを知っていました。イエスは本来よく神の事柄を知っているべきだったご自分の民に対して宣べ伝えられたのです。

ビリー・グラハムはローマ教皇を偉大な霊的指導者として掲げていますが、彼がそれを間違いだと分かっているとは言えません。同性愛者を任命するドルイド団員の本を推薦することが間違っていると、ホーリー・トリニティー・ブロンプトン教会の聖職者が知らないと言っても言う人はいるのでしょうか。事態はおかしくなっています。それは同じ

こと、全く同じ状況です。敵たちも同じ道に入り込んでいるのです。

今の状況は反キリストの到来に備えられています。聖書を公に読むことは法律で禁じられるようになります。「差別文書」と言われるのです。カナダではそう言われており、スウェーデンでもそう言われています。そしてここの人たちもそう主張するようになるのです。そして名ばかりの聖職者たちはそれについていきます。

神はあるものを求めておられます。神はマカベア家を求めています。状況がこのようになった時、神がいつも探し求めておられるものがあります。それは**本当の敵がメネラオスであると気付く人たち**です。それは立ち上がる人たちです。神は代価を支払うことをいとわない人たちを探しておられます。神の家を本当に再奉獻したいと思っいる人たちを探しておられます。それが神の求めている人たちです。

それは上からの運動ではありません。一般庶民からの運動です。それは大きな集団や大きな教会からは出てきません。かつてそうであったし、これからもそうなります。それは小さな集団から、小さな交わりから出てきます。落胆や困難、裏切りがあることを覚悟してください。しかしダニエルは終わりに彼らが勝利を得ると預言し、事実そうになりました（ダニエル 11 章 45 節）。黙示録は私たちが勝利を得ると預言しており、私たちは勝利を得るのです。

「邪悪な者が勝利を得るには、善良な者が口を閉じさえすればいい」これは聖書ではありませんが原則は聖書的です。そして現状もそうになっています。

人々はしるしやショーを求めています。しかしそれによっては信じません。もしそうならばイギリスはとうの昔に救われていたことでしょうか。リバイバルもとうの昔に来ていたことでしょうか。しかしそのように物事は進みません。それは心から動いていくものです。始まりは心からでなければなりません。もし心からでないならば、何も改善されることはありません。

誰が今日の“メネラオス”に立ち上がるか

私たちはあるものを求めています。私たちはメネラオスに対して、恐れずに剣を抜く者たちを求めているのです。それはエキュメニカルの道に下っていく福音派に対して反対する者たちです。イスラム教徒と講壇に立ち、イスラエルを非難しそれをキリスト教の奉仕と呼んでいるステファン・サイザー (*Stephen Sizer*) に立ち上がる者です。彼はイスラム教世界でのキリスト教徒虐殺に関して何も語らず、世界の全てのアラブ系

諸国で殺されている信者たちのことも語りません。そのようなことをしながら教会の中でイスラム教徒と同じ講壇に立ち、英国国教会の大聖堂でイスラエルを非難しているのです。彼が私の第一の敵です。イスラム教徒ではありません。ステファン・サイザーは私の敵です。彼が神の敵だからです。

私の第一の敵は同性愛者を任命する主教ではありません。私の敵はニッキー・ガンベルです。彼はそのような主教を推薦し、そのような本を新生したクリスチャンに薦め、称賛しているからです。

過激に聞こえるでしょうか？マカベア家たちは過激でした。彼らだけが勝利を得る者たちです。

神殿は汚されています。あなたはマカベア家の一員になりたいですか？私はあなたに代わってその質問に答えることはできません。私の言えることは、あなたが退けられるということです。あなたは標的とされます。

『民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、長い間、剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われて倒れる。』（ダニエル 11 章 33 節）

『思慮深い人のうちのある者は、終わりの時までには彼らを練り、清め、白くするために倒れるが、それは、定めの時はまだ来ないからである。』（ダニエル 11 章 35 節）

私はあなたがマカベア家の一員になるかを言うことはできません。私のできることは、あなたがもしマカベア家に入ったなら、勝利を得、祝福を得るということです。あなたがもしマカベア家の一員となればすべきことを私は語れます。そうです、私はマカベア家についての多くを語るができます。もしかすると、あなたがマカベア家について知りたいと思っていることすべてを話せるかもしれません。しかしひとつのことは言うことができません。それはあなたが本当にマカベア家の一員になりたいかどうかです。その答えは自分自身で出すべきものです。

私でしょうか？私はモデインに立っています。私はイエフダやマッタティアス、ヨナタン、エレアザルと運命と共にすると決めています。私はその決心をずっと昔に行いました。私はマカベア家に参加することを楽しんではいません。しかしいつの日か——いつの日か——神殿が再奉献され、もう一度、神の家にともしびが灯されることを私は知っているのです。

祝福がありますように。††